

自由に歩む【数多の記
録】○番目—オーバー
ロードの世界—

えーきち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【次回更新予定】

4月14日17時現在 次回未定 執筆の時間が確保出来ておらず…4月後半予定詰まってるため。

※プライベート予定と仕事の兼ね合い次第です。予定変動あり次第、こちら更新します。

オリ主最強系 たぶんハーレム ご都合主義 捏造設定あり

苦手な方はブラバどうぞ。

辛辣批判は受付けてません。

この原作の話しに主人公登場で書いて！

というような様々な要望は参考にします。

また、最強系でも戦闘がない緩い世界にも行きます。

アンチ系や残酷描写もあると思います。

書いてる人間はブランクが数年あり、久々に書いてます。

読みたいのが失踪しまくるので、自分で書きました。自己満です。

投稿速度遅めです。調子良ければ1日数話。悪ければ1ヶ月投稿ないかもね。

1ヶ月投稿なかったら、忘れた頃にふと更新されてるかもなので、お気に入り？登録的なのしといて下さい。

目次

プロローグ 0	1
プロローグ 1	5
プロローグ 2	10
プロローグ 3	17
異世界突入編 1	24
異世界突入編 2	29

プロローグ0

名、刀道歩（とうどうあゆむ）

数多の世界を歩いてきた男

此度の記録は、そんな男の人生を1片ずつ紡いだ物語である。

まず、彼を語る上で、最低限必要な情報を皆様に開示しよう。

20歳前後程の見た目で、制限を着れば高校生に見えるもない。

程よい筋肉はついていて、細身かつ、身長は170〜175cm程度。髪は黒色で長すぎず短すぎず、現代の一般的なナチュラルな髪型である。

そして重要なのは、イケメンであるか否かだが、

当然の如くイケメン部類であろう。

性格や表情などから、苦手な人もいるだろうが、

概ね、黒髪イケメンとでも認識しておいてくれ。

次に、いわゆる神様転生系のオリ主系転生者であること。

更に重要なのは、冒頭記載の通り、数多の世界を歩んできたことから、

多数の世界感の能力などを引き継ぎ、

【2次小説】 史上、稀に見る、異常な程の能力数と

チートの限界を超えた強さであることが挙げられる。

とある能力を使い、転生せずに世界感を渡る（転移する）こともあり、
転生して別世界の生を受ける場合もある。

これは追々説明して行く予定である。

彼の代表的な能力は、下記の通りである。

細かい内容は説明しないので、察するか、

どんな世界感からのどんな能力か、ご自身で調べて欲しい。

▪ 死神（BLEACH）

「付随：斬魄刀（複数）」

「付随：鬼道」

「付随：虚化」

▪ 魔法（魔法先生ネギま！）

「闇の魔法（マギアエレベア）」

「各魔法」

・忍術（NARUTO）

「各忍術

「白眼（使用時以外は通常の黒）

「万華鏡写輪眼

基本スペックとして、記憶力の高さや人外の身体能力は勿論のこと、書ききれない程の能力を所持している。

性格面は、気分屋。

長い間、生を受けてきたため、

周囲に合わせる事があっても、合わせようと思つてではなく、そうしたことでやりたいように出来ると思つての行動である。

楽しいと思つた事に打ち込む事もあれば、

墮落した生活を好む場合もある。

世界により事細かに、原作の流れを覚えている事もあれば、全く知らない場合もある。

知っている流れの場合、やりたい事があればやる気を見せる時もあるし、どうでもいいと思う事は、他者にどう言われようと曲げず、無関心を貫く。

さて、説明が長くなってしまったが、

次回より、長い長い物語の1部を記して行こう。

記して行く中で、主人公の自由奔放さに振り回されない程度に、
楽しんで頂けたらと思う。

【作者から】

そして、1話1000文字以上の制限で、

プロローグ0を投稿出来ない事に1時間程、四苦八苦しました。

このプロローグ0ですが、制限のせいで本来書く予定ではなかった主人公の性格面を
説明しています。

たぶん書きながらブレると思うので、予めご了承ください。

プロローグ1

とある世界に、1人の男が生を受けた。
名を刀道歩（とうどうあゆむ）。

一般的な家庭に生まれ、

父は会社員、母は主婦で兄弟はいない。

年を重ねる事に、父はそれなりの役職に昇格しながら、

日付けが変わってからの残業の日々を、

家族のためにめげずに過ごしていた。

そんな平凡な家庭には、

まだ覚醒前の幼子がいた。

再度、名を示す。

刀道歩。

この名は、この世界で両親から授かった名前ではない。

この世界での名前は、なんの因果か、

歩（あゆむ）である事は変わりなかったが、姓だけは異なった。

そんな姓もこの物語には、どうでもよい事なので、

山田（仮）とでもしておこう。

この山田歩（仮）は、5歳頃から覚醒し始める。

いや、正確には1歳頃から既に、

この世界の事を知らずに、

世界情勢など、この世界の知識の収集に励んでいたのである。

そして5歳頃の覚醒とは、

前世までに培った知識を元に、

この世界で起業する事である。

勿論、5歳の子供が起業などありえないが、

母親名義で起業をし、瞬く間に大手企業へと成り果てた。

両親は、歩の前世の記憶がある事などを、

最初は戸惑いもしたが、最終的に受け入れ、

彼の説得に応じ起業に力を貸した。

母は名前だけの社長となり、父は取締役の1席となった。

そんな彼が中学生となる頃に、

この世界がなんたるかを、示してくれるモノが現れた。

VRMMORPG—ユグドラシル—

ただし、彼はこの世界がなんたるかを、知らなかった。

時を経て、数年後

彼はそんなユグドラシルの世界に入り浸っていた。

するべき仕事をこなしながらではあったが、

元より多少寝ずとも稼働出来る肉体であったため、

寝る時間を削りプレイしていた。

お金は溢れる程にあるため、課金もほどほどに費やし、

今は、ある目的のために動いていた。

「眠い…さすがにそろそろ眠いな…。」

ユグドラシル内にある1つの町では、

プレイヤー商人の出店が多く溢れていた。

そんな商店を徘徊しながら、眠たげに彼は呟いていた。

ゲーム内の彼は、姿形はほぼ現実と変わらない見た目で、

服装だけは、一般的な服や、鎧などではなく、

死覇装に身を包み、腰に見える2本の刀は、

侍を彷彿とさせる姿であった。

職業：死神

そんな恐ろしい響きの職業とは思えぬ、

今も寝ながら歩いているのではと思うほどの、

眠そうな表情でふらふらと町を徘徊し、

そのままの足で近くの丘まで歩いていった。

この丘は、敵もノンアクティブで数も少なく、

プレイヤー同士の遊び場・休憩場所として使われているような安全地帯である。

彼はアイテムボックスから、枕を取り出すと、

ゲーム内で寝始める。

大人しくログアウトして寝れば良いものを、
たまにこうして仮眠をとるのが、
最近の彼のゲームの楽しみ方のひとつであった。

プロローグ2

ユグドラシルのサービス終了まで、あと1ヶ月。

「こんばんは〜」

「ばわ〜」

ギルドチャットに流れるログイン時の挨拶と、返答。

一時は数十人という人数からの返答があったが、

今ではたった一人になっている。

そんな状況の寂しさも、もうすでに慣れてしまった事に虚しさを感じつつ、

いつも通りのテンションを装い、ギルド長のモモンガがログインした。

「歩さんはいつもの町徘徊ですか？」

「そうですね、サービス終了に近づくにつれ価格が下がっていくので」

歩は、とあるきつかけから、

アインズ・ウール・ゴウンに所属し、

至高の42人に名を列ねていた。

「サービス終了までそんなに時間ないと思いますが、そんなに買ってどうするんです？」
「んー、さあ？自分でも理由がよくわからないね」

第六感とも呼べる歩の感覚が、

この世界は、ただ単純に、

このゲームが流行ったというだけの世界で終わらない気がしていた。
勿論、このゲームで過ごした日々が、物語となっていて、

ゲーム終了＝原作終了といった可能性がある事も視野にはあった。

ただ、原因はわからないが、その考えに若干の違和感を感じ、

買い物をする事で、その違和感が僅かながら払拭されているような、

言葉にしづらい行動理由だった。

だが、的を得ている。

確かにこのままでは終わらない。

歩自身が感じた、この不思議な感覚と、

モモンガが思った疑問の理由を知るまで、あと少し。

サービス終了となる、最終日にも、

歩は町を徘徊し、最終日だからこそと、

1ゴールドで投げ売りされる装備やアイテムを買い込み、

アイテムを配り捨てるプレイヤー達の中に飛び込んでいた。

買い占め、拾い集め、

挙句の果てには、終了1週間前から始まった、

リアルマネー100円分が、ゲーム内課金1万円分！

のサービスで異常な程の課金をし、

アイテムボックスの拡張やら、

課金アイテムの購入やら、

歴代アイテムが出るガチャやら、

豪遊に豪遊を重ねていた。

こんな歩を見て、モモンガは、買い物依存症かと心配していたが、

歩はそんなモモンガの気持ちなど露知らず、

自由気ままに行動していた。

モモンガもモモンガで、

『最終日だからせっかくなので遊びましょう!』

と誘えばよかつたものの、

誰か来るかもしれない、

いや、最終日だからきつと来てくれると希望を抱き、

久しぶりにログインして、ナザリツクに誰もいなかったら…と、

来るかもわからない、仲間たちのため、

ナザリツクの中で待機している。

サービス終了まで後少しのところ、

スライムの姿をした、ヘロヘロがログインし、

モモンガと二人で雑談をしていた。

そう、二人で。

ヘロヘロがログインした際に、

歩もナザリツクに戻るよう誘ってみたが、

後で行くと言残し、反応がない。

「へろへろさんお疲れのようですね」

モモンガのこの一言から、数回言葉を交わした後、サービス終了間近かつ、歩の姿が見えないままでではあったが、へろへろは話しの流れのままログアウトしていき、モモンガは一人となつてしまった。

どうしようもない、

寂しき、悲しみ、怒り、そして現実。

仲間と長きに渡り築き上げた、このナザリックという思い出、宝。

ギルドメンバーという仲間たちがいたから、

楽しくプレイし、苦勞をかけて作り上げ、

メンバーのログイン率が低下したあとも、

維持をする事に力を注いでこれた。

そんな大事な場所がなくなってしまうのに、

顔すら見せないメンバー。

連絡すらくれないメンバー。

せつかく来たのに、最後の最後、サーバー停止までおらず、途中でログアウトしてしまったメンバー。

リアル的重要さと、メンバー各々の大変さが、わかる部分があるからこそ葛藤。

そして、何より、ユグドラシルが好きで、

アインズ・ウール・ゴウンが好きで、

ナザリックが好きで、

メンバーが好きだからこそ、

ぐちゃぐちゃとした、思考の迷路。

そんなモノを、少しでも吐き出そうと、

両手の拳を振り上げ、テーブルへ叩きつけようとした瞬間。

「モモンガさん」

モモンガへの呼びかけに思わず、振り上げていた手が止まる。

ずっと買い物ばかりしていた、歩がすぐそばまで来ていた。

思考の迷路に落ちていたモモンガは、

いつからこの部屋にいたのか全く気付かなかった驚きと、

最後まで一緒に居てくれる仲間がいる事に嬉しさを感じ、

何もリアクションが出来なかった。

「せっかくなので、玉座まで散歩しません？」

歩からのこの一言に、ちよつとだけ心が救われた気がした。

プロローグ3

「玉座まで散歩しません？」

この一言から、歩とモモンガは、ナザリツク内部を散歩していた。

散歩とは言っても、サービス終了まで残された時間は少ないため、ほぼ玉座にまっすぐ向かっている形ではあるが。

モモンガの手には、アインズ・ウール・ゴウンを象徴するスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンという名の、ギルド武器が握られている。

この武器は簡単に言ってしまうと、ユグドラシルというゲーム内において、

「ちよつと頭おかしいレベル」

と思えるスペックをしており、

簡単に持ち出しているいい装備ではなかった。

最後だからと、大した理由もなく持ち出してはみたものの、

たまにしか触れる事のなかったギルド武器に

大きな威圧感を感じざるを得なかった。

このアインズ・ウール・ゴウンのギルド拠点である、

ナザリック地下大墳墓を守る、

至高の42人が作り上げたNPC達を、

道中スレ違いざまに引き連れ、先頭を歩くモモンガには、

ギルド長である事を強く感じさせるものがあつた。

玉座の間に着くと、引き連れたNPC達を整理させた。

モモンガは玉座の前まで行き、歩をチラリと見た。

「モモンガさんが座って下さい」

歩はモモンガの意を汲んでか、

モモンガが言葉にせずとも、優しげに声をかけた。

このアインズ・ウール・ゴウンという、

色んな意味で癖のある集団の、

ギルド長という大役を担ったモモンガに、

歩は、少なからず、感謝の気持ちと尊敬の意を持っている。

玉座に座ったモモンガの少し横に、

歩はそつと胡座をかいて座り、

モモンガと2人、

玉座から、玉座の間入口に向かい左右に並ぶ、

至高の42人を示す旗を眺めていた。

「後3分ぐらいですね、最後まで歩さんが居てくれて助かったというか、

嬉しかったというか…本当にありがとうございます」

そう告げたモモンガのアバターは、

目の錯覚だとは思いますが、震えているような気がした。

ゲーム終了まで、あと、2分30秒

あと2分…

あと1分30秒…

あと1分…

あと30秒…

モモンガの言葉に反応を示さなかった歩が、

「これからもお願いしますね」

と呟いた。

数十秒先の未来のことなど一切わからないモモンガは、

ユグドラシルが終わった後に、別ゲームでも誘ってくれるのかと、

この時は、少しの嬉しさを感じていた。

歩自身も、このまま終わってしまうという、

何か腑に落ちない気持ちから、

思わず口にしてしまったが、

ユグドラシルと仕事漬けの日々をおくっていた人間が、

他ゲームの事などわからず、別ゲームに誘うというような意味合いではなく、

本当に何気なく口にしていたに過ぎなかった。

あと10秒…

5

4

3

2

1

00:00:00

00:00:01

.....

「ログアウトされない...?」

サービス終了とは何だったのか。

日付けが変わるまでだったはずが、

日付けが変わった後も、強制ログアウトされない。

「歩さん、まさかの自分達でログアウトしなきゃダメなやつですかね?」

通常であれば、

メンテナンス時などは、強制ログアウトされるが、

サーバー回線都合上、同時落ちせず、

数十秒〜数分後にログアウトされるパターンなどもある、

が、サービス終了でそれは基本ありえないだろう。

モモンガは、疑問の感情と、最後の最後にユグドラシル運営は何をやっているんだという気持ちから、身に起こっている、否、このナザリック地下大墳墓に起きている異変に、まだ気付いていなかった。

「モモンガさん、ログアウトもGMコールもきかないどころか、コンソール自体出ません

よ

冷静にそう語った歩は、そう言いながら、
整列したNPC達の姿を瞳に映していた。

そんな言葉に混乱しながら、

自分でも確認したモモンガは、歩の言葉が事実だと知る。

「歩さん、これってバグですかね？何か運営で問題でもあったんでしょうか」
翌日も朝早くから社畜生活が待っているモモンガにとつて、

運営の最後の悪戯という名のバグで、夜更かしとなり寝不足になるのは、
大きな問題であったため、不安を拭うように歩へ問いかける。

すると歩は、至って冷静な表情で、

「ひとつ確かな事があります」

と何故かNPCの方を気にしながら、

小声気味に小さく口を開きそう言った。

(冷静な表情…小さく口を開き…)

表情…？動く口…?!)

モモンガに初めてユグドラシルをプレイした時の感覚に似た衝撃が走る。

何かに気づいたモモンガに、歩は、言葉を続けなかった。

「モモンガ様、至高の御方同士の会話に、

口を挟む無礼をお許してください。

何か問題でもございましたでしょうか？」

NPCの頂点である、階層守護者統括のアルベドが

意思を持つて話すという、更にモモンガへ追い打ちとなる衝撃。

(動いているなんて、ギミックス的にありえない。

ユグドラシルのサービス終了と同時にユグドラシル2の開始で、

これほどにリアルさを追求した？

高度なAIを導入？

いや、アップデートも何もしていない。

ありえないことだ。だが、ありえない事が起きている…。)

モモンガの心の中は、混乱の渦に巻き込まれる。

異世界突入編1

混乱の渦に落ちた、モモンガを待っていたのは、
精神異常系無効のスキルであった。

混乱が嘘のように消え、沈黙間と共に、
冷静になった事を理解するモモンガ。

後に、このスキルの事を

『要所ではオートスキルとして最高のスキルだが、ある意味で人としての死に近い』
と歩が漏らしたとかなんとか。

落ち着きを取り戻したモモンガは、
すぐさま機転をきかせ、

セバス・チャンと呼ばれる、戦闘メイド隊ブレアデスの指揮官であり、
執事とはなんなのか、を体現しているような、

ナザリツク地下大墳墓の執事を、周囲の散策にあたらせた。

合わせて、一部を除く、階層守護者を呼び集めるよう、アルベドへ指示をし、歩と共に、至高の41人が集まるために作られた部屋である円卓の間へと転移する。

「歩さん、この状況って恐らく…」

「まあ、なぜかナザリックとNPC達、それから、私達がアバターの状態で現実化してゐるって事でしょうね。」

「ですよね…。何がどうなっているのか。」

今を受け入れきれないところへの、

冷静な口調で現実を突きつける歩の言葉は、

目を逸らさず今を見ると、突きつける一言だった。

モモンガと歩は、第六階層にある円形闘技場にいた。

ここに階層守護者を集める指示をしており、試したい事があつたため、予定より早く到着していた。

この第六階層は、ナザリック地下大墳墓の階層で最大の広さを誇つており、アウラ・ベラ・フィオーラと、

マーレ・ベロ・フィオーレの

姉弟の双子が階層守護者となつている。

ひゅーっドン！つと効果音がつきそうな形で、

大きな建物の上から飛び降りてきた女の子。

「モモンガ様！歩様！私達の守護階層までようこそ！」

活発ながら礼儀正しきも見受けられる、姉のアウラに対し。

「お姉ちゃん、こんなところから降りれないよー。」

と弱音を吐く、何故か女の子の服装の弟マーレ。

「モモンガ様と歩様が来てるんだから、とつと飛び降りなさいよ！よ…？」

なかなか降りてこないマーレに一喝を入れたアウラだったが、

さつきまで、モモンガの横にいた歩が、

マーレの横に瞬く間もなく移動しており、驚きと恐怖により、呆然としてしまう。

至高の41人はナザリック地下大墳墓のNPC達にとって、守るべき存在でもあり、尊敬や感謝などポジティブな感情を抱く御方でありながら、自分達を生み出した、超越した存在でもあり、気分を害し怒りを買わないよう気を使う存在でもある。

そんな至高の御方々をお待たせし、

降りてこないマーレの横に御方の一人が、

突然移動したとなれば、お叱りをうけるのは当然の報い。

だが、双子という姉弟であれと設定された、

アウラとマーレは、なんだかんだ言いつつも、

しっかりと姉弟であり、そんな相手を心配するのは至極当然の事であった。

「あ、あの…す、す、すみません！すぐ、降ります。」

突如横に現れた歩に、マーレ自身が一番焦っており、

吃りながら言葉を発し、すぐにでも飛び降りようとする。

歩はそんなマーレの言葉を無視して、

マーレを荷物のように横に抱え、

モモンガとアウラがいる場所まで飛んだ。

マーレの横に現れた時のように瞬間的ではなく、

ふわつと軽いジャンプで、落下時は何かふわふわとした、

重さを感じさせないものが落ちてくるような錯覚をうむ優しいものであった。

「まあ、無理はするな」

歩はそんな言葉と共にマーレをゆつくり地面に降ろす。

「あ、あ、あ、ああありがとうございます！」

もう何がなんだかわからないマーレは、その一言を絞り出すので精一杯だった。

異世界突入編2

歩の想定外の行動から、

なんとか復旧した、マールとアウラ。

そんな2人と歩は、

スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの能力確認を

自身で召喚したモンスター相手に行うモモンガの様子を眺めていた。

「歩様はやらないんですか？」

「そうだね、そろそろかな…」

歩がそう呟くと、モモンガの能力確認が終わったところであった。

少し時間を遡り、円卓の間での会話。

「モモンガさん、守護者達を呼び出したのはいいですが、時間があるようですけど？」

「ちよっと試したい事がありました、第六階層の円形闘技場がちょうどいいなど。」

モモンガはスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの性能確認と、魔法の使用感などを試すために、階層守護者の集合までの時間に猶予を作っていた。

「歩さんも魔法とか、刀を實際振った感覚を確かめておいた方がいいんじゃないですか？」

たぶん時間の余裕はあるので。」

「そうですね、少し動かしておきます。」

「あ、あの仮面は使わないようにして下さいね…ナザリックが崩壊する可能性もあるのでは…」

モモンガが言う仮面とは、死神の虚化の能力の事である。

以前、大群にナザリック地下大墳墓へ攻め込まれた際に、使用するまでもなかったが、歩の機嫌が非常に悪く、つい使用してしまい、敵にとっての大惨事をお見舞いした事がある。

その事を知るモモンガが、心配しての一言であった。

歩は虚化の力を使う気など一切ないため、

能力確認が終わったモモンガと入れ替わりで、

表情も変えずスタスタと歩く。

モモンガはそんな歩の表情が、

少しだけ怖くなり、再度声をかけてしまった。

「あれは使わないですよね？」

普通であれば、これほどに念を押しなかつたであろうが、歩の見た目は人間種と同様で、今は現実と化し表情は変化するのが当たり前だとモモンガは思う。

そんな中、表情を崩す事のない歩に、色んな意味で恐怖を感じているのも事実。

思わず、といった感じで、そんな言葉が出てしまった。

そんな言葉に、歩の時折でる悪戯心が擦られてしまった。

「仮面は使わないですよ……」

なんとなく、「仮面は」を強調されたように感じたが、モモンガの心境で気づけるはずもなく……。

モモンガとスレ違い、背中合わせとなった歩の姿は、一瞬にして白に変わった。

いや、死覇装は変わらないので、黒い部分も見えてはいるが、白い布を一枚羽織っていた。

隊長羽織。

背中には、【0】の文字。

零ではなく、数字の「0」。

※この意味は、BLEACHの世界編で語ろうと思う。

歩はその足を止め、

ゆつくりと刀を引き抜いた。

モモンガの召喚したモンスターに向け、

その刀の切先を向ける。

一方、モモンガが待機地点につき、

歩の方に振り向いた瞬間、隊長羽織を見て小さく言葉を漏らした。

「何かイヤな予感が…」

「正解…：神殺鎗（かみしにのやり）」

ただ何かを読むかの如く、あっさりと、

そう言葉にしたが、何も起こらない。

否、何も起きていないように見えてしまった。

何も起きなかった事に、安堵するモモンガであったが、その安堵も一瞬にして消え去ることとなる。

アガギヤアア！

そんな悲鳴をあげるかの如く、叫び声を発し、

モモンガの用意したモンスターが、苦しみ出した。

かと思えば、モンスターの後側の闘技場の一部が砂煙をあげながら崩壊し、

更にその先の森林の木々が倒れゆく。

モンスターは消滅し、円形闘技場の一部は崩壊、

森林には切株の道が一直線に続き…。

「歩さん!？」

モモンガは驚きのあまり、名を呼ぶ事しか出来ず…、

精神異常無効の能力が発動する

「ボクハ キット ナニモ シテナイ」

いつもの無表情さと変わらぬまま、

カタコトの言葉で否定するものの、

微かに笑い、誰かのツツコミ待ちのように感じた、モモンガ達であった。